

す。そういう普及啓発活動をやってきました。

支部では検診です。やはりがん検診をやらなければいけないということで、検診による早期発見、早期治療が非常に重要だということでやっておりまして、今、年間支部で請負っている検診者数は1,200万人ぐらいです。50年でざっと累計しますと2億6,000万強の検診を終えました。その中で2万数千人のがんを発見しているというところでございますが、先ほどもお話がございましたように、なかなか検診受診率は上がらないですね。住民検診でいきますと、乳がんは20%前後ですから、この受診率を国の計画であります50%以上に上げないといけない。欧米などは70%、80%という受診率です。先ほど日本のがん死者が多いといいましたが、人口に占める割合は2%なのに、がん死者は4%であるということもありますから、日本は圧倒的にがん死者が多いわけです。受診率を向上させて、早期発見をして、早期治療をすれば治る機会も多いし、がん死が減るということでございますので、皆様のご協力をお願いしたいと思います。

それから、この会では、かなり早く効果のあるものを遂行していかなければいけないのではないかと考えています。例えば子宮頸がんのワクチンというのは、来年の秋ごろには認可されようとしておりますが、日本はかなり遅れております。このワクチンについては今年のUICC、国際対がん連合の会議でも話題になりました。また、今年のノーベル賞の医学生理学賞は、ツアハウゼン博士という子宮頸がんのヒトパピローマウイルスのワクチンを発見された方です。そういうふうな話題になっておりまして、これを導入していけば、70%ぐらい予防できるのではないのでしょうか。検診も含めると、恐らく100%に近い数字になりまして、がんの予防ができるということになりますね。その辺も含めて、皆様とここで議論をしていきたいと思っております。どうぞよろしく申し上げます。

■中川座長 ありがとうございます。

では、永江さんお願いします。

永江委員



■永江委員 改めまして、アフラックの永江でございます。よろしくお願いたします。

御承知の方も多いかと思いますが、私どものアフラックは、34年前、日本に初めてがん保険というものをもちこたした、がん保険のパイオニアの会社でございます。当時、昭和49年、今とは全く異なる時代背景がございまして、今でこそ、中川先生もよくおっしゃっていますが、2人に1人はがんにかかる、しかもそのうち2人に1人は克服できるということで、お医者様が御本人に病名を告知されるのも普通になってきているのですが、当時はやはり治らない病気とか死の病というイメージで、そんな中で「がん保険」というものを普及することは、非常に難しかったです。

なので、私どもは、がん保険の販売をしている会社なのですが、創業以来やってきたことは、がん保険の販売というよりは、むしろがんという病気はほかの病気とは違ってどういったものなの

か、どういう恐ろしさを持っていて、それに見舞われた患者さんや御家族の方がどういう思いをされるかということを伝承する、普及啓発ということを基本動作として、ずっと活動してきた会社でございます。ですから、まさに今回の趣旨と合致するところですよ。

会社として発しているメッセージなんですけど、まず、がんはかからないことが一番です。ですから、予防の情報活動も必要ですし、また、それでも2人に1人はかかる時代ですので、やはり早く見つけて、適切な治療をする。ただ、その予防についても、早期発見についても、適切な治療についても、やはり情報ですね。知らなければ、何もできないということで、そのために、日本の社会への貢献として、情報伝達をしていくということは、私たちも努めております。

また、がん保険の販売のほかにも、がんで親御さんを亡くされたお子さんのための奨学金の制度ですとか、小児がんですね。お子様自体ががんにかかれた場合の支援です。ゴールドリボン活動です。山田さんはピンクリボンをされていますが、なかなか注目されない、支援者も少ないゴールドリボンの活動を私どもはやっております。

今回参加させていただいて、たいへん光栄に思っていますけれども、我々もずっとこの普及啓発という活動をしていて、やはり国としてこういうことを取り上げていただくことは、日本にとってよいことだと思います。非常に力強いといえますか。なので、ここにいらっしゃる皆さんの力を合わせて、1人でも多くの日本人の方にがんを知っていただくことを進められればと思います。よろしくお願いいたします。

■中川座長 ありがとうございます。

では、山田さん、お願いします。

山田委員



■山田委員 そうなんです。がん保険に入っていて、よかったです。

入ったときは、芸能人ですから、遠い親戚とか、知らない友達だという人から、入れ入れと言われて、こんなものは何かと思ったんですけども、いざなったときには、本当に保険に助けられたなと思ったりしました。

それで、検診率が低いということにがっかりしますね。これだけ毎日毎日、本当に私は人生が変わって、啓蒙活動、啓発活動などいろいろと大切なんだよ、検診に行った方がいいんだよと、テレビ、ラジオ、イベントをいろいろやっているのにもかかわらず、まだ行っていない人がいるんだと思うと、がっかりするわけでございますけれども、いろいろと勉強になりました。イベントやトークショーや講演などをしますと、自分の意見も固まってきますし、勉強もしますし、本も読みます。皆さんから今、意見がありましたけれども、日本人は今、2分の1、2人に1人が何かしらのがんにかかるということです。まさかというこの私は1回も病気をしたことがありませんで、初めてなった病気ががんでし

た。これはびっくりしましたけれども、こういう時代がきているわけで、ここに今日、お集まりの皆さんも、半分ががんということですから、ここから割ってこちら側がみんながんなんです。そういう割り方が嫌だったら、こちら側の方がみんながんとかね。そういうことを考えると、がん＝死というのは、芸能界は悪いと思います。本当にうちの事務所も、がんになったときに言うなと言いました。古い考え方なんです。がんの人はもう仕事来ない、あるいはがんでなくても、病気になると病気というレッテルを張られるので、明るい役来ない。そんなことを言ったら、日本中の半分が暗くなってしまう。満員電車に乗ったときに、この半分はがんか、あるいはディズニーランドでミッキーと騒いでいる半分ががんかと、いろいろ考え方も変わりました。みんな背負いながらも、明るく元気に暮らしているわけで、そのために職業を追われて変わったりすることがないようにしたいなと思います。私はそれを明るく、イメージを変えていきたいなという役割でやっていきたいと思います。

働く女の、それからお母さん、特に女性というのは、頑張っているわけで、自分のことは二の次になるんです。それとか、病んでいることを恥ずかしいと思って言わなかったり、子どもたちもお家の人も、まさかお母さんはとっている。でも、そうではない。検診に行って、がんとわかって、かなりステージが進んでいても、今は医療が進んでいますから、今日駄目でも、明日絶対助かる。そういうことを思って、明るくやっていく。イメージを変えていくことをやりたいと思っています。

それから企業も、大きな企業は 100%検診に行くことを義務づける。それから、小さい企業でも、町単位でも、学校単位でも、何か検診をしたら得点を付ける。優良学校であるとか、優良企業であるとか、何かえらいねとみんなと言ってあげるとかね。

私は、芸能人ばかりがん友を集めて、スター混声合唱団というのを細々と始めましたけれども、なかなか知名度抜群で、歌唱力は二の次なんですけれども、いろいろと全国で頑張っている。例えばそういうチームがいて、その企業を応援するコンサートを開くとか、えらいですね、検診率が 100%でしたねとか、そういうこともやっていきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

■中川座長 山田さんに委員になってもらって、本当によかったですね。この会の方向性が見えた気がします。

山田さん御自身は、乳がん検診はなさっていたんですか。

■山田委員 やっていたんです。実は祖母が乳がんで、昔のやり方ですから、背中までざっぱり切るような手術を小さいときに見ていましたから、お前は遺伝だから乳がんになるよと言われていたので、随分大きくなってからは、本当に検診に行っていたんです。ところが、3年。これが魔ですね。先生が替わってしまって、去年行かなかったから、今年に行かなければいけないなというときにです。ですから、この3年の間にめきめきと頭角を現してきたのが乳がんです。

ただ、乳がんは勉強になりました。しこりがあるものとないものがあります。乳腺の広がりというものもあって、これはマンモグラフィという機械が進んでいたから、私小さいものも発見できました。3つもあったので、この世の終わりかと思いましたが、これもまたイメージが先行していますね。間違えた考え。こういうのも言っていかなければいけないなと思います。